

# 層流境界層方程式の解法について

玉 木 章 夫

## On the Solution of the Laminar Boundary Layer Equations.

Humio TAMAKI

**ABSTRACT**—An approximate method for solving the equations for steady, two dimensional boundary layer by using Mises transformation is presented.

Chapter 1 deals with incompressible fluid. As is shown by Mises and Kármán-Millikan, equation of motion for the boundary layer is written :

$$\partial z / \partial \varphi = \nu \sqrt{1 - z/z_0} \partial^2 z / \partial \psi^2$$

where  $\nu$  is kinematic viscosity,  $z = (u_1^2 - u^2)/2$  ( $u_1$ : outside velocity),  $z_0 = z(\psi=0) = u_1^2/2$ ,  $\varphi = \int_0^x u_1 dx$  and  $\psi$  is stream function defined by  $u = \partial \psi / \partial y$ ,  $v = -\partial \psi / \partial x$ . Now,  $1 - z/z_0$  in the right side can be expanded in power series of  $\psi$  if we take as  $z$  Kármán-Millikan's outer solution. The essential point of the present method lies in taking only the first term as an approximation. Then using instead of  $\varphi$  a new variable which is a function of  $\varphi$ , we can obtain  $z$  in an integral form containing the distribution of the outside velocity in the integrand. Several numerical examples show that the accuracy of the method is satisfactory.

In Chapter 2, compressible fluid with Prandtl number 1 is considered, for the case without surface heat transfer. By proper modifications in the definitions of  $\varphi$ ,  $\psi$  and  $z$ , the method of the first chapter is also available for this case. Similarity between compressible and incompressible case is discussed. (Received May 2, 1951)

縮まない流體の二次元層流境界層の方程式は Mises の導入した變數變換によつて熱傳導の方程式と似た形に變形される。本文ではこれを解くための比較的簡單でしかも精度のよい近似解法を示す。この方法によれば、ふつうに行われるように物體表面のある位置における境界層の速度分布の形がその點の層外速度勾配を含むパラメーター  $\delta^2/\nu \cdot du_1/dx$  ( $\delta$ : 層の厚さ,  $\nu$ : 動粘性係數,  $du_1/dx$ : 流れの方向の層外速度勾配) のみによつて定まるというような假定を用いる必要はなく、任意の位置における層内の速度分布はその點より上流の層外速度の分布を含む積分によつて求まる。さらにこの方法は僅かな變更によつて縮む流體の場合に容易に擴張される。従つてまず第 1 章では縮まない流體を考え、ついで第 2 章で縮む流體の場

合への擴張を示すことにする。

### 第 1 章 縮まない流體

#### § 1. 基礎方程式

縮まない流體の二次元、定常的層流境界層の方程式はよく知られているように次の形に書かれる。

$$u \partial u / \partial x + v \partial u / \partial y = u_1 du_1 / dx + \nu \partial^2 u / \partial y^2 \quad (1)$$

こゝに  $x$  は前縁岐點から物體表面に沿うての距離,  $y$  は表面に直角方向の距離,  $u$ ,  $v$  はそれぞれ  $x$ ,  $y$  方向の速度成分,  $u_1$  は層外速度,  $\nu$  は動粘性係數である。

連續の式

$$\partial u / \partial x + \partial v / \partial y = 0 \quad (2)$$

は次の關係を満たす流れ函數  $\psi$  を導入することによつて満足される。

$$u = \partial\psi/\partial y, \quad v = -\partial\psi/\partial x. \quad (3)$$

さて Mises<sup>(1)</sup> に従つて  $x, y$  の代りに  $x, \psi$  を独立変数にとり、未知函数として

$$z = (u_1^2 - u^2)/2 \quad (4)$$

をとる。

$$\begin{aligned} (\partial/\partial x)_y &= (\partial/\partial x)_\psi + (\partial/\partial \psi)_x (\partial\psi/\partial x)_y \\ &= (\partial/\partial x)_\psi - v(\partial/\partial \psi)_x, \\ (\partial/\partial y)_x &= (\partial/\partial \psi)_x (\partial\psi/\partial y)_x = u(\partial/\partial \psi)_x \end{aligned} \quad (5)$$

であることから方程式(1)は次のように書表わされる。

$$\partial z/\partial x = vu\partial^2 z/\partial \psi^2. \quad (6)$$

さらに Kármán-Millikan<sup>(2)</sup> に従つて

$$\varphi = \int_0^x u_1 dx \quad (7)$$

を導入すると、(6)は

$$\partial z/\partial \varphi = v(u/u_1)\partial^2 z/\partial \psi^2 \quad (8)$$

と變形される。

さて後の計算に便利のようにすべての量を次元のない形で表わすことにする。  $U, L$  をそれぞれ代表的な速度、長さとして、

$$\begin{aligned} u^* &= u/U, \quad u_1^* = u_1/U, \quad z^* = z/U^2, \\ \varphi^* &= \varphi/(UL), \quad \psi^* = \psi\sqrt{R}/(2UL), \\ R &= UL/\nu \end{aligned} \quad (9)$$

によつて \* のついた量を定義する。そして以後簡単のため \* を省略して書くことにする。こうすれば(8)は

$$\partial z/\partial \varphi = 1/4 \cdot (u/u_1)\partial^2 z/\partial \psi^2 \quad (10)$$

と書かれる。あるいは  $\psi=0$  (表面)における  $z$  を  $z_0$  で表わすと、  $z_0 = u_1^2/2$  であることから

$$u/u_1 = \sqrt{1 - 2z/u_1^2} = \sqrt{1 - z/z_0} \quad (11)$$

従つて(10)は次のように書かれる。

$$\partial z/\partial \varphi = 1/4 \cdot \sqrt{1 - z/z_0} \partial^2 z/\partial \psi^2 \quad (12)$$

この方程式を  $\psi=0$  で  $z=z_0=u_1^2/2$ ;  $\psi \rightarrow \infty$  で  $z \rightarrow 0$ ,  $\varphi=0$  で  $z=0$  という条件の下に解くことができる。よいのである。

## § 2. 近似解法

方程式(12)を厳密に解く方法は現在のところ見當らない。近似的な解法としては Kármán-Millikan の方法があるがこれは計算が面倒である上に精度も十分とは言えないように思われる。本文ではこれと幾分異なつた取扱ひ方を示すことにする。

(12)において  $\sqrt{1 - z/z_0}$  が一定であるとすればこの方程式は  $z$  を温度、 $\varphi$  を時間、 $\psi$  を位置座標と考えれば固体内の一次元熱伝導の方程式と同じであり、われわれの問題は半無限の棒の一端の温度が時間と共に變つて行くときに各點の温度を求める問題と一致する。

Kármán-Millikan は  $\sqrt{1 - z/z_0}$  すなわち  $u/u_1$  を 1 に等しいとおきこれに対する解を “outer solution” と稱している。これは層の外の方ではよい近似であるが表面の近くでは近似が悪くなるので別に適當な “inner solution” を求め、この兩者をつなぎ合わせるという方法を採用している。

これから述べる方法においては次のような近似を行う。(12)の右邊の  $1 - z/z_0$  すなわち  $(u/u_1)^2$  に outer solution を入れればこれは  $\psi$  の冪級数として表わすことができる。そこでその  $\psi$  の 1 次の項のみをとることにする。いゝかえると眞の  $(u/u_1)^2$  の代りに outer solution の  $(u/u_1)^2 - \psi$  曲線の表面における切線を用いることにする。勿論この直線としては outer solution の切線以外のものを用いてもよいのであるが、筆者の別の論文\* に示したように上のおき方は簡単でしかも壓力降下のあるときも上昇のあるときも眞の  $(u/u_1)^2$  をかなりよく近似するものである。

さてこのように假定すると、

$$u/u_1 = \sqrt{1 - z/z_0} = C(\varphi)\psi^{1/2} \quad (13)$$

とおくことができる。こゝに  $C(\varphi)$  は  $\varphi$  の函数であり、outer solution にもとづく  $C(\varphi)$  の實際の表現は次節に示すことにする。上の関係を用いると(12)は

$$\partial z/\partial \varphi = 1/4 \cdot C(\varphi)\psi^{1/2}\partial^2 z/\partial \psi^2$$

となる。そこで  $\varphi$  の代りに

$$t = \int_0^\varphi C(\varphi)/4 \cdot d\varphi \quad (14)$$

によつて定義される  $t$  を用いると、この方程式は

$$\partial z/\partial t = \psi^{1/2}\partial^2 z/\partial \psi^2$$

あるいは

$$\partial^2 z/\partial \psi^2 - \psi^{-1/2}\partial z/\partial t = 0 \quad (15)$$

とかゝれる。この式は Huber<sup>(3)</sup> が取扱つた方程

\* 生産技術研究所報告 1, No. 8. (1951). この論文では同じような近似法で境界層の熱エネルギーの方程式を解くことを試みている。

式の特別の場合に相当する.\* そして境界条件:

$$\begin{aligned} \psi=0 & \text{ で } z=z_0=u_1^2/2=f(t)/2, \\ \psi \rightarrow \infty & \text{ で } z \rightarrow 0, \\ t=0 & \text{ で } z=0 \end{aligned} \quad (16)$$

を満足する解は次のように書表わされる.

$$z(\psi, t) = \frac{1}{2} \frac{\psi}{(3/2)^{4/3} \Gamma(2/3)} \int_0^t \frac{e^{-\frac{4\psi^{3/2}}{9(t-\xi)}}}{(t-\xi)^{5/3}} f(\xi) d\xi. \quad (17)$$

従つて,  $u_1^2$  が  $t$  の函数  $f(t)$  として與えられれば上式から直ちに解が計算されるわけである. 次にこの式をさらに実用的な形に變形しよう.

$$(4/9)^{2/3} \psi / (t-\xi)^{2/3} = r$$

とおいて積分變數を  $r$  にかえる. そして

$$(4/9)^{2/3} \psi / t^{2/3} = w$$

とおくと,

$$z = \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \int_w^\infty e^{-r^{3/2}} f\left(t - \frac{4}{9} \frac{\psi^{3/2}}{r^{3/2}}\right) dr$$

となる. いま  $f(t)$  が  $t$  の多項式

$$f(t) = c_0 + c_1 t + c_2 t^2 + \dots + c_n t^n$$

$$= \sum_{i=0}^n c_i t^i \quad (18)$$

で表わされたとする. このときには

$$\begin{aligned} f\left(t - \frac{4}{9} \frac{\psi^{3/2}}{r^{3/2}}\right) &= \sum_{i=0}^n c_i \left(t - \frac{4}{9} \frac{\psi^{3/2}}{r^{3/2}}\right)^i \\ &= \sum_{i=0}^n c_i t^i \left(1 - \frac{w^{3/2}}{r^{3/2}}\right)^i \end{aligned}$$

となるから, 結局

$$z = \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \sum_{i=0}^n c_i t^i \sum_{r=0}^i \frac{(-1)^r i!}{(i-r)! r!} w^{3r/2} \int_w^\infty \frac{e^{-r^{3/2}}}{r^{3r/2}} dr$$

が得られる. 簡単のため

$$(-1)^r w^{3r/2} \int_w^\infty \frac{e^{-r^{3/2}}}{r^{3r/2}} dr = H_r(w)$$

とおくと,

$$z = \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \sum_{i=0}^n c_i t^i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} H_r(w) \quad (19)$$

となる.  $H_r(w)$  ( $r \geq 1$ ) に対する漸化式は次の通

\* Huber は一般に  $\partial^2 u / \partial x^2 - x^\alpha \partial u / \partial t = 0$ , ( $\alpha > -1$ ) の解を求めている. 上の場合は  $\alpha = -1/2$  に相当する. なお解(17)は  $f(0)=0$  であつても  $f(0) \neq 0$  であつても成立つ.

りである.

$$\begin{aligned} H_r(w) &= (-1)^r \frac{2}{3r-2} w e^{-w^{3/2}} \\ &\quad + \frac{3}{3r-2} w^{3/2} H_{r-1}(w). \end{aligned}$$

$r=3$  までを書下すと,

$$\begin{aligned} H_0 &= \int_w^\infty e^{-r^{3/2}} dr, \\ H_1 &= -2we^{-w^{3/2}} + 3w^{3/2}H_0, \\ H_2 &= \frac{1}{2}we^{-w^{3/2}} - \frac{3}{2}w^{5/2}e^{-w^{3/2}} + \frac{9}{4}w^3H_0, \\ H_3 &= -\frac{2}{7}we^{-w^{3/2}} + \frac{3}{14}w^{5/2}e^{-w^{3/2}} - \frac{9}{14}w^4e^{-w^{3/2}} \\ &\quad + \frac{27}{28}w^{9/2}H_0. \end{aligned} \quad (20)$$

第1圖にこれらの函数を圖示する.

さて實際の場合には  $u_1^2$  を  $t$  の唯一の多項式で表わそうとすると多くの項を必要とするので, 全體の領域をある  $t_1$  において2分して,  $u_1^2$  を二つの多項式

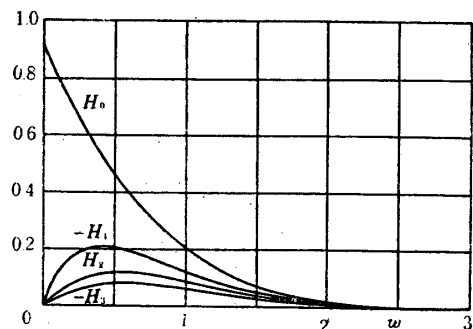
$$u_1^2 = \begin{cases} f_1(t) = \sum_{i=0}^n c_i t^i, & t \leq t_1 \\ f_2(t) = \sum_{i=0}^m d_i t^i, & t \geq t_1 \end{cases}$$

と表わした方がよい.

$t \leq t_1$  に対する解は(19)で與えられる.

$t \geq t_1$  に対する解は次のように書かれる.

$$\begin{aligned} z &= \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \left[ \sum_{i=0}^n c_i t^i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} H_r(w) \right. \\ &\quad - \sum_{i=0}^n c_i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} t^{i-r} (t-t_1)^r H_r(w') \\ &\quad \left. + \sum_{i=0}^m d_i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} t^{i-r} (t-t_1)^r H_r(w') \right] \quad (21) \end{aligned}$$



第1圖  $H_0, H_1, H_2, H_3$ .

ただし  $w = (4/9)^{2/3} \psi / t^{2/3}$ ;  $w' = (4/9)^{2/3} \psi / (t - t_1)^{2/3}$ .

### § 3. $C(\varphi)$ の表現

さて上に用いている  $t$  は (14) によつて  $\varphi$  から計算されるものであるが、この計算を行うためには与えられた層外速度分布に對して  $C(\varphi)$  の形を知る必要がある。この節ではこれを outer solution から求めることとする。

問題とする領域全体の  $u_1^2$  の分布を  $\varphi_1$  を接續點として、

$$u_1^2(\varphi) = \begin{cases} \sum_{i=0}^n b_i \varphi^i, & \varphi \leq \varphi_1 \\ \sum_{i=0}^m \beta_i \varphi^i, & \varphi \geq \varphi_1 \end{cases}$$

と表わすとき、 $\varphi=0$  で  $z=0$ ,  $\psi=0$  で  $z=z_0 = u_1^2(\varphi)/2$ ,  $\psi \rightarrow \infty$  で  $z \rightarrow 0$  なる条件を満足する解は Kármán-Millikan が示したように次の形で與えられる。  $\varphi \leq \varphi_1$  では

$$z = \sum_{i=0}^n b_i \varphi^i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} g_r(\psi/\sqrt{\varphi}),$$

$\varphi \geq \varphi_1$  では

$$\begin{aligned} z = & \sum_{i=0}^n b_i \varphi^i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} g_r(\psi/\sqrt{\varphi}) \\ & - \sum_{i=0}^n b_i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} \varphi^{i-r}(\varphi \\ & - \varphi_1)^r g_r(\psi/\sqrt{\varphi - \varphi_1}) \\ & + \sum_{i=0}^m \beta_i \sum_{r=0}^i \frac{i!}{(i-r)! r!} \varphi^{i-r}(\varphi \\ & - \varphi_1)^r g_r(\psi/\sqrt{\varphi - \varphi_1}). \end{aligned} \quad (22)$$

ここに  $g_r$  は、アーギュメントを  $x$  で代表させると

$$\begin{aligned} g_0(x) = & \frac{1}{2}(1 - \operatorname{erf} x), \quad g_1(x) = -\frac{1}{\sqrt{\pi}} x e^{-x^2} \\ & + x^2(1 - \operatorname{erf} x), \\ g_2(x) = & \frac{1}{3\sqrt{\pi}} x e^{-x^2} - \frac{2}{3\sqrt{\pi}} x^3 e^{-x^2} \\ & + \frac{2}{3} x^4(1 - \operatorname{erf} x), \\ g_3(x) = & -\frac{1}{5\sqrt{\pi}} x e^{-x^2} + \frac{2}{15\sqrt{\pi}} x^3 e^{-x^2} \\ & - \frac{4}{15\sqrt{\pi}} x^5 e^{-x^2} + \frac{4}{15} x^6(1 - \operatorname{erf} x), \\ & \dots \dots \dots \\ \operatorname{erf} x = & \frac{2}{\sqrt{\pi}} \int_0^x e^{-\alpha^2} d\alpha \end{aligned} \quad (23)$$

と表わされる。

これから明かなように、 $x$  の十分小さいところで

$$\begin{aligned} g_0(x) = & \frac{1}{2} - \frac{1}{\sqrt{\pi}} x, \quad g_1(x) = -\frac{1}{\sqrt{\pi}} x, \\ g_2(x) = & \frac{1}{3\sqrt{\pi}} x, \quad g_3(x) = -\frac{1}{5\sqrt{\pi}} x, \dots \end{aligned}$$

であることに注意すれば、(22) 式より  $C(\varphi)$  は次のように書表わされる。ただし  $u_1^2$  を  $\varphi$  の三次式で表わすとする。

$\varphi \leq \varphi_1$  に對しては

$$C(\varphi) = \frac{\sqrt{2}}{\pi^{1/4}} \frac{1}{\varphi^{1/4}} \frac{\sqrt{b_0 + 2b_1\varphi + \frac{8}{3}b_2\varphi^2 + \frac{16}{5}b_3\varphi^3}}{\sqrt{b_0 + b_1\varphi + b_2\varphi^2 + b_3\varphi^3}},$$

$\varphi \geq \varphi_1$  に對しては

$$\begin{aligned} C(\varphi) = & \frac{\sqrt{2}}{\pi^{1/4}} \frac{1}{\varphi^{1/4}} \frac{1}{\sqrt{\beta_0 + \beta_1\varphi + \beta_2\varphi^2 + \beta_3\varphi^3}} \\ & \left[ \left\{ b_0 + 2b_1\varphi + \frac{8}{3}b_2\varphi^2 + \frac{16}{5}b_3\varphi^3 \right\} \right. \\ & + \frac{1}{\sqrt{1 - \varphi_1/\varphi}} \left\{ (\beta_0 - b_0) + (\beta_1 - b_1)\varphi \left( 1 + (1 \right. \right. \\ & \left. \left. - \varphi_1/\varphi) \right) + (\beta_2 - b_2)\varphi^2 \left( 1 + 2(1 - \varphi_1/\varphi) \right. \right. \\ & \left. \left. - \frac{1}{3}(1 - \varphi_1/\varphi)^2 \right) + (\beta_3 - b_3)\varphi^3 \left( 1 + 3(1 \right. \right. \\ & \left. \left. - \varphi_1/\varphi) - (1 - \varphi_1/\varphi)^2 + \frac{1}{5}(1 - \varphi_1/\varphi)^3 \right) \right\} \left. \right]^{1/2}. \end{aligned} \quad (24)$$

### § 4. 剝離點、表面摩擦抵抗係数の計算

剝離點においては  $(\partial u / \partial y)_{y=0} = 0$ , 従つて  $(\partial z / \partial \psi)_{\psi=0} = 0$  である。従つて  $z$  を  $\psi$  について展開したとき  $\psi$  の一次の項の係数が 0 となるような  $t$  が剝離點を與える。(20) 式から  $w$  の十分小さいところで

$$\begin{aligned} H_0(w) = & 2/3 \cdot \Gamma(2/3) - w, \quad H_1(w) = -2w, \\ H_2(w) = & w/2, \quad H_3(w) = -2/7 \cdot w \end{aligned}$$

であることに注意すれば、(21) から剝離點に對する  $t$  は  $u_1^2(t)$  として  $t$  の三次式の組合わせを用いるとき、次の式で與えられる。

$$\begin{aligned} (c_0 + 3c_1 t + \frac{9}{2} c_2 t^2 + \frac{81}{14} c_3 t^3) + \frac{1}{(1 - t_1/t)^{2/3}} \\ \left[ (d_0 - c_0) + (d_1 - c_1)t \left\{ 1 + 2(1 - \frac{t_1}{t}) \right\} \right. \\ \left. + (d_2 - c_2)t^2 \left\{ 1 + 4(1 - \frac{t_1}{t}) - \frac{1}{2}(1 - \frac{t_1}{t})^2 \right\} \right] \end{aligned}$$

$$+(d_3-c_3)t^3\left\{1+6\left(1-\frac{t_1}{t}\right)-\frac{3}{2}\left(1-\frac{t_1}{t}\right)^2+\frac{2}{7}\left(1-\frac{t_1}{t}\right)^3\right\}=0. \quad (25)$$

また、これまで用いて来た量が(9)によつて定義された次元のない量であることに注意すると、任意の  $t$  における局部的摩擦抵抗係数  $\tau_0/(\frac{1}{2}\rho u_1^2)$  ( $\tau_0$ : 表面摩擦應力) は、

$t \leq t_1$  に対しては

$$\frac{2\tau_0}{\rho u_1^2} = \sqrt{\frac{\nu}{UL}} \frac{1}{c_0+c_1t+c_2t^2+c_3t^3} \cdot \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \cdot \left(\frac{4}{9}\right)^{2/3} \frac{1}{t^{2/3}} (c_0+3c_1t+\frac{9}{2}c_2t^2+\frac{81}{14}c_3t^3)^*,$$

$t \geq t_1$  に対しては

$$\begin{aligned} \frac{2\tau_0}{\rho u_1^2} = & \sqrt{\frac{\nu}{UL}} \frac{1}{d_0+d_1t+d_2t^2+d_3t^3} \cdot \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \\ & \left(\frac{4}{9}\right)^{2/3} \frac{1}{t^{2/3}} \left\{ c_0+3c_1t+\frac{9}{2}c_2t^2+\frac{81}{14}c_3t^3 \right\} \\ & + \frac{1}{(1-t_1/t)^{2/3}} \left\{ (d_0-c_0)+(d_1-c_1)t \left(1+2\left(1-\frac{t_1}{t}\right)\right) \right. \\ & \left. + (d_2-c_2)t^2 \left(1+4\left(1-\frac{t_1}{t}\right)-\frac{1}{2}\left(1-\frac{t_1}{t}\right)^2\right) \right. \\ & \left. + (d_3-c_3)t^3 \left(1+6\left(1-\frac{t_1}{t}\right)-\frac{3}{2}\left(1-\frac{t_1}{t}\right)^2+\frac{2}{7}\left(1-\frac{t_1}{t}\right)^3\right) \right\} \end{aligned} \quad (26)$$

で與えられる。

### § 5. 層内の速度分布を $x, y$ の函数として表わすこと。

上に示した方法では  $z$  が  $\psi$  と  $t$  の函数として與えられるが、實用上は速度  $u$  を  $x, y$  の函数で表わすことが必要である。實際の長さ  $x, y$  の代りに

$$x^*=x/L, \quad y^*=y/L \quad (L \text{ は代表長})$$

を定義する。そして他の量に對すると同じく \* を省略して單に  $x, y$  と書くことにする。そうすれば

$$y = \frac{2}{\sqrt{R_0}} \int_0^\psi \frac{d\psi}{u} = \frac{2}{u_1 \sqrt{R_0}} \int_0^\psi \frac{d\psi}{\sqrt{1-z/z_0}} \quad (27)$$

また  $x$  と  $t$  との関係は(7)と(14)とから求まる。

つぎに本文の近似解をいくつかの例について嚴

密解あるいは實驗結果と比較しよう。

### § 6. 平板に沿う流れ

この場合には  $u_1 = \text{const.}$  である。そこで  $u_1 = U$  (代表速度) とする。解(19)において  $c_0=1, c_1, c_2, \dots, c_n=0$  であるから、

$$z = \frac{3}{4\Gamma(2/3)} H_0(x) = \frac{3}{4\Gamma(2/3)} \left\{ \frac{2}{3} \Gamma(2/3) - \int_0^w e^{-\gamma^{3/2}} d\gamma \right\} = \frac{1}{2} - \frac{3}{4\Gamma(2/3)} \int_0^w e^{-\gamma^{3/2}} d\gamma. \quad (28)$$

ここに  $w = (4/9)^{2/3} \psi / t^{2/3}$ 。そして  $t$  は(24)の第1式で  $b_0=1, b_1, b_2, \dots, b_n=0$  であるから、

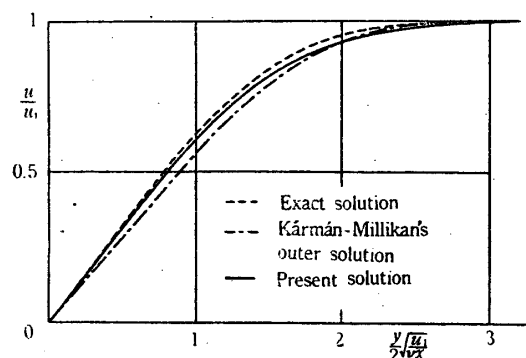
$$t = \frac{\sqrt{2}}{3\pi^{1/4}} \varphi^{3/4} = \frac{\sqrt{2}}{3\pi^{1/4}} \left( \frac{u_1 x}{UL} \right)^{3/4} = \frac{\sqrt{2}}{3\pi^{1/4}} \left( \frac{x}{L} \right)^{3/4}$$

である。

これから(27)を用いて境界層の速度分布が計算される。ふつうに行われているように  $u/u_1$  を  $y\sqrt{u_1/\nu x}/2$  に對して描いたものを第2圖に示す。圖に示すように Blasius の解とかなりよく一致する。比較のため同じ圖に outer solution をも記入した。

また局部的摩擦抵抗係数  $c_f$  は

$$c_f = \mu(\partial u / \partial y)_0 / \frac{1}{2} \rho u_1^2 = \frac{3}{4\Gamma(2/3)} \left( \frac{4}{9} \right)^{2/3} \left( \frac{3\pi^{1/4}}{\sqrt{2}} \right)^{2/3} \sqrt{\nu / u_1 x}.$$



第2圖 平板の境界層の速度分布

\*  $u_1^2$  を  $t$  の  $n$  次式  $\sum_{i=0}^n c_i t^i$  で表わすときは、

$$\begin{aligned} \frac{2\tau_0}{\rho u_1^2} = & \sqrt{\frac{\nu}{UL}} \frac{1}{\sum c_i t^i} \cdot \frac{3}{4} \frac{1}{\Gamma(2/3)} \left(\frac{4}{9}\right)^{2/3} \frac{1}{t^{2/3}} \\ & (c_0+3c_1t+\frac{9}{2}c_2t^2+\frac{81}{14}c_3t^3+\dots \\ & + n! \frac{3}{1} \cdot \frac{3}{4} \dots \frac{3}{3n-2} c_n t^n). \end{aligned}$$

$\Gamma(2/3)=1.354$  を代入すれば

$$c_f=0.6445 \sqrt{\nu/u_1 x} \quad (29)$$

を得る。この式の数因子は厳密な値 0.664 より 2.9 パーセント小さい。

### § 7. Howarth の解との比較

次に Howarth<sup>(4)</sup> の解いた  $u_1=u_0-\beta x$  の場合を考えよう、速度および距離をそれぞれ代表速度  $u_0$ , 代表長  $L$  を用いて無次元化し,  $x/L$ ,  $\beta L/u_0$  を改めて  $x$ ,  $\beta$  とかくと,

$$u_1=1-\beta x. \quad (30)$$

そこで  $\beta x=\xi$

とおけば

$$\varphi=x(1-\beta x/2)=x(1-\xi/2),$$

$$u_1^2=1-2\beta x+\beta^2 x^2=1-2\beta\varphi.$$

$2\beta\varphi=\zeta$  とかけば

$$u_1^2=1-\zeta, \quad \zeta=2\xi(1-\xi/2). \quad (31)$$

§ 3 の記法によれば,  $b_0=1$ ,  $b_1=-2\beta$  である,

$$t=\int_0^\varphi \frac{C(\varphi)}{4} d\varphi = \frac{\sqrt{2}}{\pi^{1/4}} \int_0^\varphi \frac{\sqrt{1+2b_1\varphi}}{4\varphi^{1/4} \sqrt{1+b_1\varphi}} d\varphi$$

において, 積分変数を  $\zeta=-b_1\varphi$  に変じ,  $\zeta$  が 1 に比べて小さいことを考慮して被積分函数を二項定理で展開して積分し,  $(3\pi^{1/4}/\sqrt{2})(-b_1)^{3/4}t=s$  とおけば,

$$s=\zeta^{3/4}\left(1-\frac{3}{14}\zeta-\frac{15}{88}\zeta^2-\frac{39}{240}\zeta^3-\dots\right). \quad (32)$$

また上の式から  $\zeta$  を  $s$  で表わすと, 近似的に

$$\zeta=s^{4/3}\left(1+\frac{4}{14}s^{4/3}+\frac{205}{539}s^{8/3}\right) \quad (33)$$

を得る。これと(32)式(こゝに示した項までとつたもの)は  $\zeta=0.3$  の邊まで十分によく一致する(第3圖参照)。さて,  $u_1^2$  は  $\zeta$  については直線的に減少するが,  $t$  あるいは  $s$  についてはそうではない。そこで

$$u_1^2=1+c_1 t+c_2 t^2=1+a_1 s+a_2 s^2 \quad (34)$$

とおく。そして  $s$  のある値  $s_1$  と  $s_1/2$  の二点において速度が(31)で與えられる値と一致するようにする。  $s_1$  に對應する  $\zeta$  を  $\zeta_1$  と書き, (32)と(33)によつて  $s_1/2$  に對應する  $\zeta$  を  $\zeta_1$  で表わすと, 結局  $a_1 s_1$ ,  $a_2 s_1^2$  が  $\zeta_1$  を用いて,

$$a_1 s_1 = -0.5874\zeta_1 + 0.2736\zeta_1^2 + 0.3009\zeta_1^3,$$

$$a_2 s_1^2 = -0.4126\zeta_1 - 0.2736\zeta_1^2 - 0.3009\zeta_1^3 \quad (35)$$

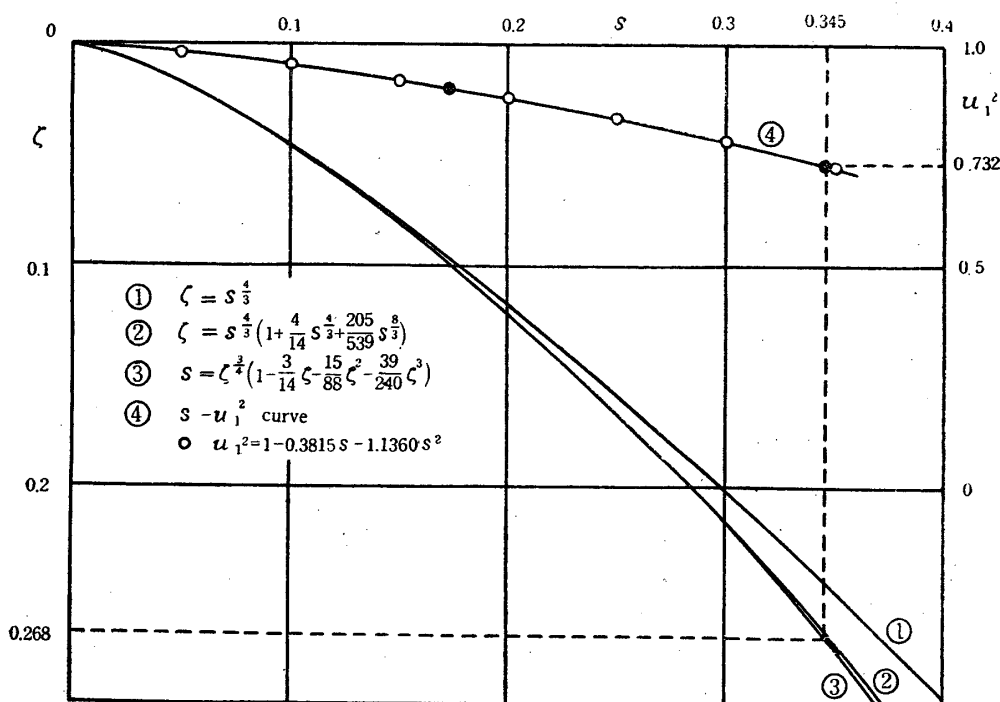
と表わされる。これを剥離の条件式

$$1+3a_1 s_1+9/2 \cdot a_2 s_1^2=0$$

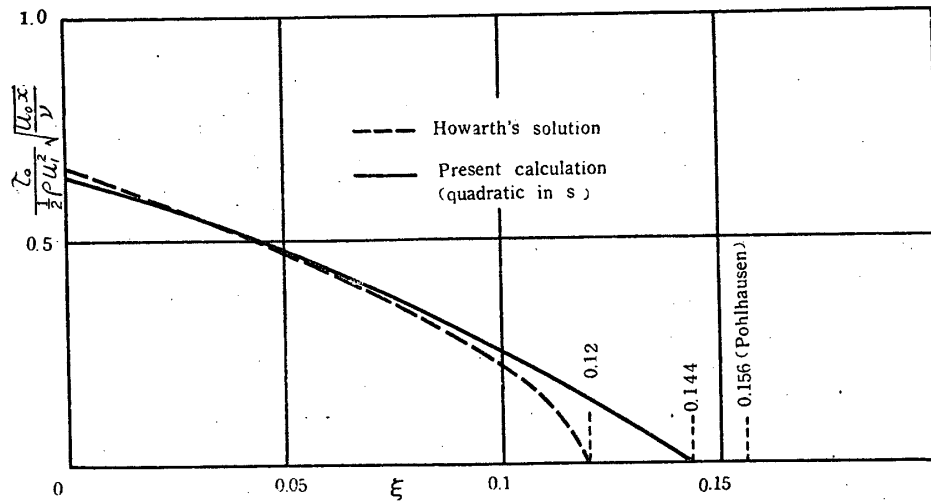
に代入すれば剥離を與える  $\zeta_1(=\zeta_s)$  およびこれに對應する  $\xi(=\xi_s)$  が次の値となる。

$$\zeta_s=0.268, \quad \xi_s=0.144. \quad (36)$$

なお(35)式の  $\zeta_1$  の二乗以上の項を省略することは(32), (33)の代りに  $s=\zeta^{3/4}$  とすることで, これは,  $\varphi$  から  $t$  を求める際に  $u_1^2=\text{const.}$  に對する outer solution を用いることに相當する。



第3圖 直線的な速度降下の場合の諸曲線



第4圖 直線的速度降下の場合の摩擦應力の分布

この省略によれば

$$\xi_s = 0.276, \quad \xi_s = 0.149 \quad (37)$$

となり幾らか剝離が後れる。しかしその差はあまり大きいものではなく、このことから(12)式の $\varepsilon$ - $\psi$ の直線関係のとり方はあまり厳密さを要しないことが分る。また $u_1^2$ を $s$ の三次式で表わし、 $s=s_1, 2/3 \cdot s_1, 1/3 \cdot s_1$ において正しい値に合致ようにすると、 $\xi_s = 0.148$ を得る。またこの場合(37)の近似に相當するものは $\xi_s = 0.155$ となる。

Howarthによれば $\xi_s = 0.12$ , Kármán-Millikan, Pohlhausenの方法によれば $\xi_s$ はそれぞれ0.102, 0.156である。かくして本文の方法による $\xi_s$ はHowarthとPohlhausenの中間に位することが分る。

いま $\xi_s = 0.268$  ( $s = 0.345$ )までを、 $s = 0.345, 0.1725$ において正しい $u_1^2$ を一致する二次式で表した場合に、 $\xi$ に対して $\tau_0 / \frac{1}{2} \rho u_1^2 \cdot \sqrt{u_0 x / \nu}$

((26)式によつて計算される)を求めると第4圖のようになる。上にも示したように剝離はいくらか後れるが、Howarthの解との一致はかなり良好であるといえよう。

#### § 8. $u_1 = cx$ ( $c$ : 常數) の場合

速度、距離を適當な代表量を用いて無次元化してから改めて上の形におく。この場合には $u_1^2 = 2c\varphi$ となるから、 $t$ と $\varphi$ との関係は直ちに積分できて、

$$t = (2/3\pi^{1/4})\varphi^{3/4}$$

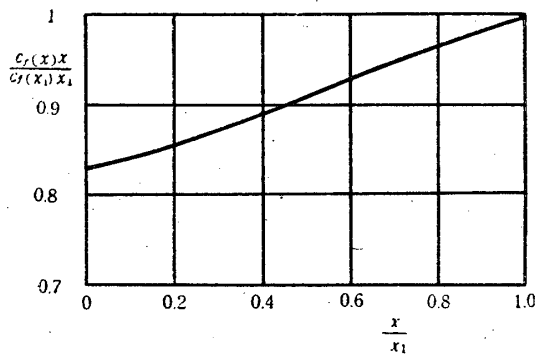
を得る。従つて $u_1^2$ は $t^{4/3}$ に比例する。前節と同様に $u_1^2$ を $t$ の二次式で表わすとして、 $\varphi$ のある値 $\varphi_1$ に對應する $t$ を $t_1$ とおき、 $t = t_1, t_1/2$ において速度が正しい値をとるようにする。このようにして最後にもとの $x, u_1$ に戻すと、 $t = t_1$ に對應する $x = x_1$ における局部的摩擦抵抗係數 $c_f(x_1)$ として次の式を得る。

$$c_f(x_1) = \tau_0 / \frac{1}{2} \rho u_1^2 = 2.618 \sqrt{\nu / u_1 x_1}.$$

また $u_1^2$ を $t = t_1, 2/3 \cdot t_1, 1/3 \cdot t_1$ において正しい値をとる三次式で表わすことにすれば

$c_f(x_1) \sqrt{\nu / u_1 x_1} = 2.532$ を得る。嚴密解によればこの數値は2.465である。従つて二次式、三次式を用いたときの誤差はそれぞれ6.2, 2.7パーセントである。

こゝで注意したいのはこの値は $x = x_1$ までの速度分布を $t$ の多項式で表わしたときの $x_1$ における値であるということである。そこでいま $u_1^2$ を $t$ の二次式で表わした場合について $0 \leq x \leq x_1$ における $c_f$ の分布を調べてみる。計算は省略して結果だけを述べることにする。嚴密解によれば $[c_f(x) \cdot x] / [c_f(x_1) \cdot x_1]$ は1に等しいが、上の場合にはこれが $x/x_1$  (あるいは $t/t_1$ ) によつて多少變化する。しかしその値は $x/x_1 = 0$ においてさえも0.8289であつて1との差はあまり大きなものではない。(第5圖参照)なおこのことに関しては§10の終を参照されたい。



第5図  $u_1 = cx$  の場合.  $0 \leq x \leq x_1$  における  $c_f(x)x/c_f(x_1)x_1$

### § 9. Schubauer の実験との比較

Schubauer<sup>(5)</sup> は長, 短軸の比が 2.96:1 の楕圓柱の長軸の方向に流れが當る場合についていろいろの位置で境界層の速度分布を測定し, さらに煙の流れの観察から剝離が  $x = 1.99 \pm 0.02$  で起ることを見出している. こゝに  $x$  は前縁岐点から表面に沿うての距離を短軸の長さで表わしたものである.  $u_1^2$  を  $t$  の多項式で表わすためには  $\varphi$  と  $t$  との関係を求める必要がある. このためにはまず  $u_1^2$  を  $\varphi$  の多項式で表わさねばならぬ. Millikan<sup>(6)</sup> はこれについて,

$$0 \leq \varphi \leq 1 \text{ では } u_1^2 = 5.53\varphi - 6.44\varphi^2 + 2.56\varphi^3$$

$$1 \leq \varphi \leq 2.5 \text{ では } u_1^2 = 1.159 + 0.8253\varphi - 0.3871\varphi^2 + 0.0455\varphi^3,$$

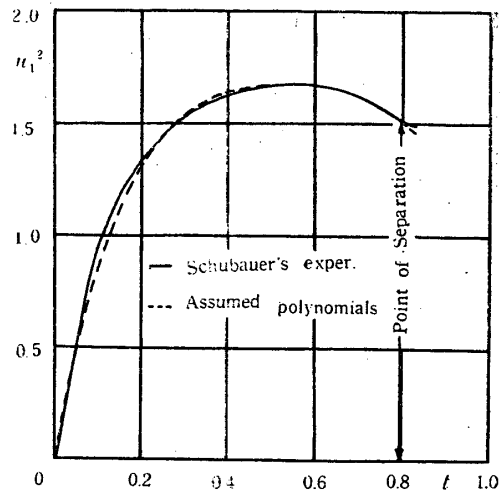
という式を與えている. この式は  $\varphi = 1$  において前半と後半の式の  $u_1^2$  に僅かの差があつて (24) の計算に都合が悪いので前半の式の  $\varphi^3$  の係数 2.56 の代りに 2.5527 としたものをを用いることとした.

第 6 圖には  $u_1^2$  と  $t$  との関係を示す. これを  $\varphi = 1$  に對應する  $t = 0.449$  を継ぎ目として,

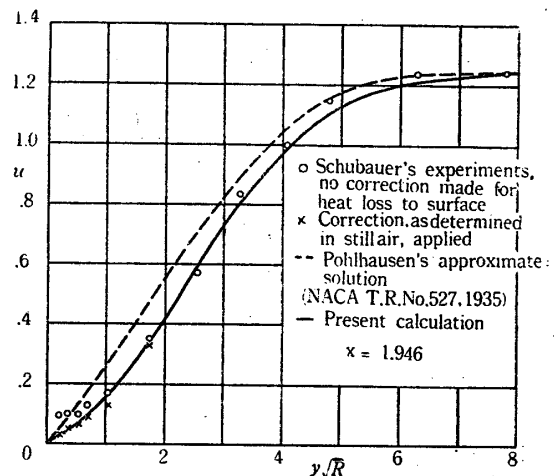
$$0 \leq t \leq 0.449 \text{ では } u_1^2 = 10.250t - 21.789t^2 + 15.944t^3,$$

$$0.449 \leq t \leq 0.8 \text{ では } u_1^2 = 1.8444 - 2.149t + 5.993t^2 - 4.805t^3.$$

と表わす. (第 6 圖) すると (25) 式から剝離は  $t = 0.794$  で起ることとなる. これは  $\varphi = 2.45$ ,  $x = 2.07$  に相當する. この數値は Schubauer の値より稍, 大きい. しかし  $x = 1.946$  ( $t = 0.766$ ) における速度分布を (21) および (27) によつて求めてこれを Schubauer の實測値と比べてみると第 7 圖のように極めてよく一致する.



第6図 Schubauer の実験における  $u_1^2$  の分布



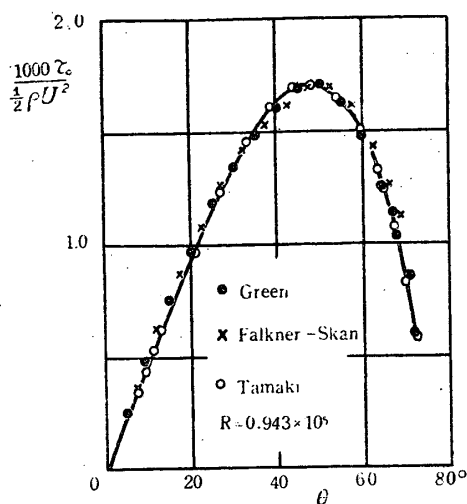
第7図 Schubauer の実験との比較.  
 $x = 1.946$  における境界層の速度分布

### § 10. 圓柱表面の摩擦の分布

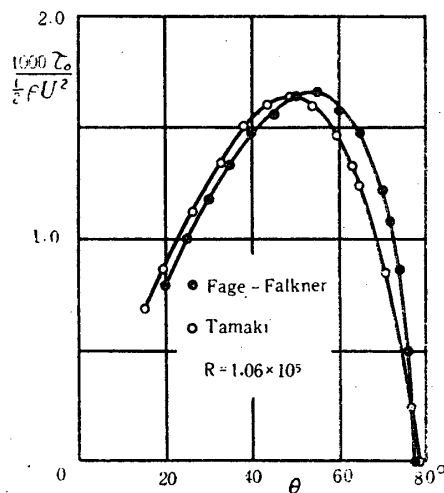
$Ud/\nu = 0.943 \times 10^5$  ( $U$ : 主流速度,  $d$ : 直径) における壓力分布の實測値を用いて Green<sup>(7)</sup>, Falkner-Skan<sup>(8)</sup> は圓柱表面の摩擦の分布を計算している. 本法による計算をこれと比較すると第 8 圖のようになりによく一致している. また  $Ud/\nu = 1.06 \times 10^5$  において Fage-Falkner<sup>(9)</sup> は表面管によつて摩擦の分布を測定している. このときの壓力分布の實測値を用いて計算した  $\tau_0/\frac{1}{2}\rho U^2$  の分布を第 9 圖に示す\*. 計算によると摩擦の最大値が實驗値より少し上流側に出る. なおこゝで注

\* 第 8 圖の計算では  $u_1^2(\varphi)$ ,  $u_1^2(t)$  共に三次式の組合せを, また第 9 圖の計算では  $u_1^2(\varphi)$  には二次式の組合せ,  $u_1^2(t)$  には三次式の組合せを用いた.





第8図 圆柱表面の摩擦應力の分布.  
計算値の比較



第9図 圆柱表面の摩擦應力の分布. 実験  
値との比較

意すべきことは本文の方法では速度分布を広い範囲にわたって  $t$  の簡単な多項式で表わすので前

縁附近の分布を正しく表わすことができないことである。§8に示したように  $u_1$  が  $x$  に比例するときは  $u_1^2$  は  $t^{1/3}$  に比例するが、多項式表示では  $t$  の小さいところでその一次の項だけが残るからである。しかしこのことは局部的摩擦抵抗係数に対してはあまり大きな誤差を引起さない。

(§8参照) 従つてこの部分の  $\tau_0 / \frac{1}{2} \rho U^2$  を求め

るにはまず (26) によつて  $\tau_0 / \frac{1}{2} \rho u_1^2$  を求めこれに多項式によるのでなしに正しい  $u_1^2 / U^2$  を掛けてやれば大體正しい値が求まるのである。圖の中心角  $15^\circ$  以下の點はこのようにして求めた。

### §11. $\varphi$ と $t$ との関係の簡易化

以上述べたようにこの方法はいろいろな場合にかなりよい精度をもっているようである。たゞその缺點は  $u_1$  の積分から  $\varphi$  を求め、 $u_1^2$  を  $\varphi$  の多項式で表わし、その係数を用いて積分により  $t$  を求め、 $u_1^2$  を再び  $t$  の多項式で表わすというように、 $u_1^2$  の多項式表示を二重に行うという手間があることである。しかし §7 の例からも窺われるように減速領域では  $C(\varphi)$  として  $u_1 = \text{const.}$  の場合の値を用いてもさして大きな差異を生じない。従つて  $\varphi$  から  $t$  を計算する際には  $u_1$  の最大値より少し上流の適當な位置までを  $u_1 = c\alpha (u_1^2 = 2c\varphi)$  に、それより下流は  $u_1 = \text{const.}$  でおきかえることにすれば  $\varphi$  と  $t$  との関係は一定に定まるからこれを用いれば多項式表示を二度行う必要はなくなり計算は著しく簡単になる。

いま  $\varphi = \varphi_1$  を継ぎ目として

$0 \leq \varphi \leq \varphi_1$  では  $u_1^2 = b_1 \varphi$ ;  $\varphi \geq \varphi_1$  では  $u_1^2 = \beta_0$

第 1 表

| $s$ | $F_1(s)$ | $s$ | $F_2(s)$ | $s$ | $F_2(s)$ | $s$ | $F_2(s)$ | $s$ | $F_2(s)$ |
|-----|----------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|-----|----------|
| 0   | 0        | 1.0 | 0.501    | 3.0 | 1.004    | 5.0 | 1.394    | 7.0 | 1.742    |
| 0.1 | 0.089    | 1.2 | 0.566    | 3.2 | 1.046    | 5.2 | 1.430    | 7.2 | 1.775    |
| 0.2 | 0.150    | 1.4 | 0.624    | 3.4 | 1.087    | 5.4 | 1.466    | 7.4 | 1.808    |
| 0.3 | 0.203    | 1.6 | 0.678    | 3.6 | 1.127    | 5.6 | 1.502    | 7.6 | 1.841    |
| 0.4 | 0.252    | 1.8 | 0.729    | 3.8 | 1.167    | 5.8 | 1.537    | 7.8 | 1.873    |
| 0.5 | 0.298    | 2.0 | 0.779    | 4.0 | 1.206    | 6.0 | 1.572    | 8.0 | 1.905    |
| 0.6 | 0.341    | 2.2 | 0.826    | 4.2 | 1.245    | 6.2 | 1.607    | 8.2 | 1.937    |
| 0.7 | 0.383    | 2.4 | 0.872    | 4.4 | 1.283    | 6.4 | 1.641    | 8.4 | 1.969    |
| 0.8 | 0.424    | 2.6 | 0.917    | 4.6 | 1.320    | 6.6 | 1.675    | 8.6 | 2.001    |
| 0.9 | 0.463    | 2.8 | 0.961    | 4.8 | 1.357    | 6.8 | 1.709    | 8.8 | 2.032    |

(たゞし  $\beta_0 = b_1 \varphi_1$ ) として(14)と(24)に従つて  $t$  を計算すると、 $\varphi/\varphi_1 = s$  とおくと、

$$0 \leq \varphi \leq \varphi_1 \text{ では } t = \frac{2}{3\pi^{1/4}} \varphi_1^{3/4} s^{3/4},$$

$$\varphi \geq \varphi_1 \text{ では } t = \frac{2}{3\pi^{1/4}} \varphi_1^{3/4} [1 + \frac{3}{4}$$

$$\int_1^s (\sqrt{s} - \sqrt{s-1})^{1/2} ds]$$

となる。それぞれの領域で  $\varphi_1^{3/4}$  に乗すべき係数、

$$F_1(s) = \frac{2}{3\pi^{1/4}} s^{3/4}, \quad F_2(s) = \frac{2}{3\pi^{1/4}} [1 + \frac{3}{4}$$

$$\int_1^s (\sqrt{s} - \sqrt{s-1})^{1/2} ds]$$

を第1表に示す。これを用いれば  $\varphi_1$  を定めさえすればすぐに  $t$  が計算できる。實際、多くの場合この方法で充分なようである。

## 第2章 緒む 流體

### § 1. 基礎方程式

この場合の境界層の運動方程式は

$$\rho u \frac{\partial u}{\partial x} + \rho v \frac{\partial u}{\partial y} = \rho_1 u_1 \frac{du_1}{dx} + \frac{\partial}{\partial y} (\mu \frac{\partial u}{\partial y}) \quad (1)$$

と書かれる。文字の意味は前と同じである。密度  $\rho$ , 粘性係数  $\mu$  は場所によつて異なる。添字 1 は層の外側を表わす。

いま添字  $s$  を以て層外流を断熱的に静止させた状態を表わすことにする。

連続の式は

$$u = (\rho_s/\rho) \partial \psi / \partial y, \quad v = -(\rho_s/\rho) \partial \psi / \partial x \quad (2)$$

を満足する流れ函数  $\psi$  を導入することによつて満たされる。

さて氣體の比熱は一定、かつ Prandtl 数が 1 であると假定し、物體表面で熱傳達がないとすれば、層内の速度  $u$  と絶対温度  $T$  との間に

$$u^2 + 2c_p T = \text{const.} \quad (c_p: \text{定壓比熱})$$

なる関係が成立つ。層の外側の断熱流に対しては

$$u_1^2 + 2c_p T_1 = 2c_p T_s = \text{const.}$$

が成立つから、結局

$$u + 2c_p T = u_1^2 + 2c_p T_1 = 2c_p T_s \quad (3)$$

が成立つ。そこで Dorodnizin<sup>(10)</sup> に倣つて

$$u_1^2 / (2c_p T_s) = \sigma_1, \quad u^2 / (2c_p T_s) = \sigma \quad (4)$$

なる量を導入する。  $\sigma_1$  と層外氣流の Mach 数  $M (=u_1/a_1$ , たゞし  $a_1$  は局所音速) との関係は

$$\sigma_1 = \frac{k-1}{2} M^2 / (1 + \frac{k-1}{2} M^2) \quad (5)$$

で與えられる。こゝに  $k$  は比熱の比 ( $c_p/c_v$ ) で空氣の場合は 1.4 である。  $\sigma$  を用いると

$$T_1/T_s = 1 - \sigma_1, \quad T/T_s = 1 - \sigma$$

となる。

次に粘性係数  $\mu$  は絶対温度  $T$  の  $n$  乗に比例すると假定する。  $n$  は空氣の場合 0.76 とするのが普通である。この假定より

$$\mu/\mu_s = (T/T_s)^n = (1-\sigma)^n. \quad (6)$$

密度  $\rho$  については層外流が断熱的であることと、層内では  $y$  方向に壓力が變らないことから次の關係が成立つ。

$$\rho/\rho_s = (1-\sigma_1)^{k/k-1} / (1-\sigma). \quad (7)$$

さて第1章と同様に獨立變數を  $x, y$  から  $x, \psi$  に變ずると、

$$(\partial/\partial x)_y = (\partial/\partial x)_\psi + (\partial/\partial \psi)_x (\partial \psi / \partial x)_y$$

$$= (\partial/\partial x)_\psi - (\rho/\rho_s) u (\partial/\partial \psi)_x,$$

$$(\partial/\partial y)_x = (\partial/\partial \psi)_x (\partial \psi / \partial y)_x = (\rho/\rho_s) u (\partial/\partial \psi)_x$$

を用いて、(1)は

$$u \frac{\partial u}{\partial x} = \frac{1-\sigma}{1-\sigma_1} u_1 \frac{du_1}{dx} + v_s (1-\sigma_1)^{k/k-1} u \frac{\partial}{\partial \psi} [(1-\sigma)^{n-1} u \frac{\partial u}{\partial \psi}]$$

と變形される。こゝに  $v_s$  は  $\mu_s/\rho_s$  を表わす。

さてこの式の右邊第二項の  $[(1-\sigma)^{n-1}]$  内にある  $(1-\sigma)^{n-1}$  を考える。空氣の場合には  $M=1$  において  $\sigma_1=0.1667$  であることを考慮すれば  $\sigma$  は表面附近では非常に小さく、その上冪指數  $n-1$  が小さいことから、この項は 1 に近い。

そこでこゝでは  $(1-\sigma)^{n-1}=1$  とおく。そして  $k/k-1$  を  $\lambda$  と書くことにすれば、

$$(1-\sigma_1) u \frac{\partial u}{\partial x} - (1-\sigma) u_1 \frac{du_1}{dx} = v_s (1-\sigma_1)^{\lambda+1} u \frac{\partial}{\partial \psi} (u \frac{\partial u}{\partial \psi})$$

となる。そこで

$$z = \frac{1}{1-\sigma_1} \frac{u_1^2 - u^2}{2} \quad (8)$$

を導入する。そして(4)に注意すれば上の方程式は

$$\frac{\partial z}{\partial x} = v_s (1-\sigma_1)^{\lambda} u \frac{\partial^2 z}{\partial \psi^2}$$

となり、さらに  $x$  の代りに

$$\varphi = \int_0^z u_1(1-\sigma_1)^{\lambda} dx \quad (9)$$

を導入すると、結局

$$\frac{\partial z}{\partial \varphi} = \nu_s \frac{u}{u_1} \frac{\partial^2 z}{\partial \psi^2}$$

が得られる。 $z_0$  を以て  $\psi=0$  における  $z$  を表わすとするば  $u/u_1 = \sqrt{1-z/z_0}$  であるから上の式は

$$\frac{\partial z}{\partial \varphi} = \nu_s \sqrt{1-\frac{z}{z_0}} \frac{\partial^2 z}{\partial \psi^2}$$

と書かれる。境界条件は  $\varphi=0$  で  $z=0$ ,  $\psi=0$  で  $z=z_0(\varphi)=(1/(1-\sigma_1)) \cdot u_1^2/2$ ,  $\psi \rightarrow \infty$  で  $z \rightarrow 0$  である。

## § 2. 無次元化

前章と同じように代表長  $L$ , 代表速度  $U$  を用いて無次元量

$$\begin{aligned} U^* &= u/U, \quad u_1^* = u_1/U, \quad z^* = z/U^2, \\ \varphi^* &= \varphi/(UL), \quad \psi^* = \psi \sqrt{R_s}/(2UL), \\ R_s &= UL/\nu_s \end{aligned} \quad (11)$$

を定義する。こゝに  $R_s$  の定義には  $\nu_s$  を用いている。前と同様に簡単のため  $*$  を省略して書くと (10) は

$$\frac{\partial z}{\partial \varphi} = \frac{1}{4} \sqrt{1-\frac{z}{z_0}} \frac{\partial^2 z}{\partial \psi^2} \quad (12)$$

境界条件:  $\varphi=0$  で  $z=0$ ,

$$\psi=0 \quad \text{で} \quad z=z_0(\varphi) = \frac{1}{1-\sigma_1} \frac{u_1^2}{2},$$

$$\psi \rightarrow \infty \quad \text{で} \quad z \rightarrow 0$$

となる。これを第1章の縮まない流体の場合と比べると両者の差は、 $z$  の定義に  $1/(1-\sigma_1)$  が掛っていること、従つて  $\psi=0$  における境界条件が違ふこと、 $\nu$  の代りに  $\nu_s$  が入っていることだけであつて、方程式の形は全然同じである。そして  $\psi=0$  における条件  $z_0=(1/(1-\sigma_1)) \cdot u_1^2/2$  は層外の流れを與えれば簡単に計算されるから、上の方程式の解法は前章に示したものと全く同じである。実際の計算では  $u_1^2/(1-\sigma_1)$  を  $\varphi$  あるいは  $z$  の多項式で表わすことを考えればよい。

以上で縮む流体の境界層の計算が縮まない流体の場合と殆ど同じ位の手数で行われることを示したが、次にこの両者の間の相似関係をいまずこし詳しく述べておこう。

## § 3. 縮む流体と縮まない流体の境界層における相似関係

(12) の解  $z$  に對應する  $y$  の値は流れ函数の定義の式 (2) から求まる。すなわち

$$y = \int_0^z \frac{\rho_s}{\rho} \frac{d\psi}{u}$$

いま  $y$  の代りに

$$\eta = \int_0^y \frac{\rho}{\rho_s} dy$$

を導入すれば、

$$\eta = \int_0^\psi \frac{d\psi}{u}$$

となる。そこで  $y^*=y/L$ ,  $\eta^*=\eta/L$  を他の量と同様に  $*$  を省略して書くと、 $\eta$  は次の式で與えられることになる。

$$\eta = \frac{2}{\sqrt{R_s}} \int_0^\psi \frac{d\psi}{u} = \frac{2}{\sqrt{R_s}} \frac{1}{\sqrt{2(1-\sigma_1)z_0}} \int_0^\psi \frac{d\psi}{\sqrt{1-z/z_0}}$$

一方縮まない流体の場合には  $y$  が次の式で與えられる。

$$y = \frac{2}{\sqrt{R}} \int_0^\psi \frac{d\psi}{u} = \frac{2}{\sqrt{R}} \frac{1}{\sqrt{2z_0}} \int_0^\psi \frac{d\psi}{\sqrt{1-z/z_0}}$$

そこでいま  $z_0(\varphi)=1/(1-\sigma_1) \cdot u_1^2/2$  が縮まない流体における  $z_0(\varphi)=u_1^2/2$  と等しいような縮む流体の流れを考える。このときには両者の解  $z(\varphi, \psi)$  は数値的に等しい。以下に数値的に互に等しくなる量を列記する。

| 縮む流体  | 縮まない流体  |
|---|---|
| $z_0(\varphi) = \frac{1}{1-\sigma_1} \frac{u_1^2}{2}$   | $z_0(\varphi) = \frac{u_1^2}{2}$  |
| $z(\varphi, \psi)$  | $z(\varphi, \psi)$  |
| $\frac{d}{d\varphi} \left( \frac{1}{1-\sigma_1} \frac{u_1^2}{2} \right) = \frac{1}{(1-\sigma_1)^2} \frac{du_1}{d\xi}$ | $\frac{d}{d\varphi} \left( \frac{u_1^2}{2} \right) = \frac{du_1}{d\xi}$           |
| $(1-\sigma_1) \frac{A^{*2}}{\nu_s}, (1-\sigma_1) \frac{\theta^2}{\nu_s}$  | $\frac{\delta^{*2}}{\nu}, \frac{\theta^2}{\nu}$                                   |
| $\frac{\theta^2}{\nu_s} \frac{1}{1-\sigma_1} \frac{du_1}{d\xi}$   | $\frac{\theta^2}{\nu} \frac{du_1}{d\xi}$  |
| $\frac{\mu_s (\partial u / \partial \eta)_0}{\rho_s u_1^2} \cdot \frac{u_1 \theta}{\nu_s}$                            | $\frac{\mu (\partial u / \partial y)_0}{\rho u_1^2} \cdot \frac{u_1 \theta}{\nu}$ |
| $A^*/\theta$  | $\delta^*/\theta$   |

$$\text{こゝに, } \xi = \int_0^z (1-\sigma_1)^{\lambda} dx,$$

$$\int_0^{\eta'} \frac{u}{u_1} \left(1 - \frac{u}{u_1}\right) d\eta = \theta, \quad \int_0^{\eta'} \frac{u}{u_1} \left(1 - \frac{u}{u_1}\right) dy = \theta,$$

$$\int_0^{\eta'} \left(1 - \frac{u}{u_1}\right) d\eta = A^*, \quad \int_0^{\eta'} \left(1 - \frac{u}{u_1}\right) dy = \delta^*, \quad (13)$$

である。  $h$  は  $u/u_1$  が充分 1 に近くなる  $y$  を、 $h'$  はこれに対応する  $\eta$  を表わす。

こゝで導入された  $\xi$  および  $\eta$  は Dorodnizin がはじめて用いた変数である。本文の方法によると相似関係が彼の方法より明確かつ一般的に示され、またこの変数変換が必然的に現れて来るのが特徴である。 $\xi$  についていえば  $\varphi$  の定義式より

$$\varphi = \int_0^x u_1 (1 - \sigma_1)^{\frac{1}{2}} dx = \int_0^{\xi} u_1 d\xi$$

となる。

さて上の対照から次のような近似法が生れる。

縮まない流体の場合に、ある点の境界層の速度分布の形がその点における層外速度勾配と層の厚さ（便宜上、上に定義した運動量厚  $\theta$  を用いることとする）で作ったパラメーター  $\theta^2/\nu \cdot du_1/dx$  だけで定まると考えるのは普通に採られている方法であるが、縮む流体の場合これに対応するものは  $\theta^2/\nu_s \cdot 1/(1 - \sigma_1) \cdot du_1/d\xi$  となる。

縮まない流体の場合にはよく知られているように  $\mu(\partial u/\partial y)_0/\rho u_1^2 \cdot u_1 \theta/\nu$  および  $\delta^*/\theta$  と上記のパラメーター  $\theta^2/\nu \cdot du_1/dx$  との関係を適当に近似化すると運動量積分の方程式を積分することにより  $x$  と  $\theta$  従つて  $x$  と  $\theta^2/\nu \cdot du_1/dx$  との関係を求めることができ、このパラメーターがある負値に達する点として剥離点を求めることができる。このパラメーターと  $\mu(\partial u/\partial y)_0/\rho u_1^2 \cdot u_1 \theta/\nu$  および  $\delta^*/\theta$  との関係は運動方程式が解けるような特別な  $u_1$  の分布に対する解を用いて定める。谷教授<sup>(11)</sup>により、 $u_1^2$  が  $\varphi$  について直線的に変化する場合の解（Howarth の解）にもとづいての近似計算法が示されているが、その場合の上記の諸量の数値は縮む流体において  $u_1^2/(1 - \sigma_1)$  が  $\varphi$  について直線的に変化する場合、いゝかえると  $1/(1 - \sigma_1)^2 \cdot du_1/d\xi = \text{const.}$  の場合のそれぞれ対応する量の数値に適用される。

### § 3. 運動量積分の積分

縮まない流体の場合境界層の運動方程式を  $y$  方向に積分することにより次の運動量積分の方程式が得られることは周知の事柄である。

$$\frac{\tau_0}{\rho u_1^2} = \frac{d\theta}{dx} + \left( \frac{\delta^*}{\theta} + 2 \right) \frac{\theta}{u_1} \frac{du_1}{dx} \quad (14)$$

こゝに  $\tau_0 = \mu(\partial u/\partial y)_0$ ,  $\delta^*$  および  $\theta$  は (13) で定義された排除厚、運動量厚である。

パラメーター  $\theta^2/\nu \cdot du_1/dx$  を  $H$  と書くことにする。 $\tau_0/\rho u_1^2 \cdot u_1 \theta/\nu$  および  $\delta^*/\theta$  は  $H$  の函数で谷教授によれば

$$2\tau_0/\rho u_1^2 \cdot u_1 \theta/\nu - (3 + 2\delta^*/\theta)H = \Psi$$

なる量は物体の前縁岐点から剥離点に至るまでの間、 $H$  に対して殆ど直線的に変化する。そこで

$$\Psi = c - \kappa H \quad (c, \kappa \text{ は常數})$$

とおくと (14) は容易に積分できて

$$\frac{\theta^2}{\nu} = c \frac{1}{u_1^{\kappa+1}} \int_0^x u_1^{\kappa} dx$$

が得られ、従つて  $H$  は次の如く書かれる。

$$H = \frac{\theta^2}{\nu} \frac{du_1}{dx} = c \frac{du_1}{dx} \frac{1}{u_1^{\kappa+1}} \int_0^x u_1^{\kappa} dx. \quad (15)$$

$c, \kappa$  の数値としては Howarth の取扱つた直線速度勾配の場合の解にもとづけば  $c = 0.441$ ,  $\kappa = 4.7 (\sim 5)$  とすればよいことが示されている。そして剥離点は  $H = -0.084$  で與えられる。

さて縮む流体の場合、 $\xi, \eta$  を用い運動方程式を  $y$  方向に積分することにより (13) に定義された  $\Delta^*$ ,  $\theta$  および  $S_0 = \mu_s(\partial u/\partial \eta)_0$  を用いて、\*\*\*

$$\frac{S_0}{\rho_s u_1^2} = \frac{d\theta}{d\xi} + \left( \frac{\Delta^*}{\theta} + 2 - \sigma_1 \right) \frac{\theta}{u_1} \frac{1}{1 - \sigma_1} \frac{du_1}{d\xi} \quad (16)$$

が得られる。こゝで

$$2 \frac{S_0}{\rho_s u_1^2} \frac{u_1 \theta}{\nu} - \left( 3 + 2 \frac{\Delta^*}{\theta} \right) \frac{\theta^2}{\nu_s} \frac{1}{1 - \sigma_1} \frac{du_1}{d\xi}$$

という量は  $u_1^2/(1 - \sigma_1)$  が  $\varphi$  について直線的に變る流れに対しては縮まない流体の場合の Howarth の解にもとづく前記の  $\Psi$  と同一の値をとる。従つて上と同じ考にもとづき (16) から

$$\frac{d}{d\xi} \left( \frac{\theta^2}{\nu^s} \right) + \frac{\theta^2}{\nu_s} \frac{1}{u_1} \frac{du_1}{d\xi} \left( \frac{\kappa + 1 - 2\sigma_1}{1 - \sigma_1} \right) = \frac{c}{u_1}$$

を得る。

$$\frac{d\sigma_1}{d\xi} = \frac{2\sigma_1}{u_1} \frac{du_1}{d\xi}$$

なることに注意すれば上の式から

\* この論文では一般に  $u_1 = a + bx^n$  の場合の解が取扱われている。

\*\* 同論文では  $\theta^2/\nu \cdot du_1/dx$  を  $\sigma$ ,  $\delta^*/\theta$  を  $H$  と書いてある。本文では  $\sigma$  を別の意味に用いているのでこれと異なる記號を用いる。

\*\*\* (6) 式から、 $\mu_s$  は物体表面における  $\mu$  と等しいことを注意しておく。

$$\frac{\theta^2}{\nu_s} = c \frac{(1-\sigma_1)^{\frac{\kappa-1}{2}}}{u_1^{\kappa+1}} \int_0^\xi \frac{u_1^\kappa}{(1-\sigma_1)^{\frac{\kappa-1}{2}}} d\xi$$

が得られる。\$c=0.441\$, \$\kappa=5\$ とすれば

$$\frac{\theta^2}{\nu_s} = 0.441 \frac{(1-\sigma_1)^2}{u_1^6} \int_0^\xi \frac{u_1^5}{(1-\sigma_1)^2} d\xi,$$

$$H = \frac{\theta^2}{\nu_s} \frac{1}{1-\sigma_1} \frac{du_1}{d\xi} = 0.441 \frac{du_1}{d\xi} \frac{1-\sigma_1}{u_1^6}$$

$$\int_0^\xi \frac{u_1^5}{(1-\sigma_1)^2} d\xi$$

を得る。さらに \$c\_p/c\_v=1.4\$ とすれば \$\lambda=3.5\$, \$d\xi=(1-\sigma\_1)^{3.5}dx\$, \$du\_1/d\xi=du\_1/dx \cdot (1-\sigma\_1)^{-3.5}\$ と  
なるから結局

$$H = 0.441 \frac{du_1}{dx} \frac{1}{u_1^6 (1-\sigma_1)^{2.5}}$$

$$\int_0^x u_1^5 (1-\sigma_1)^{1.5} dx \quad (17)$$

が得られる。剥離点は \$H=-0.084\$ で與えられる。

この式は物體表面上の \$u\_1\$ の分布が與えられたとき剥離點の位置を決定するのに役立つ。實際には積分中の \$(1-\sigma\_1)^{1.5}\$ は \$\sigma\_1\$ が小さいためあまり變化しないから \$\sigma\_1\$ として例えば無限上流の値 \$\sigma\_\infty\$ を代用することとして積分の外へ出し分母の \$1-\sigma\_1\$ にも \$1-\sigma\_\infty\$ を用いるとすれば

$$H = 0.441 \frac{du_1}{dx} \frac{1}{u_1^6 (1-\sigma_\infty)} \int_0^x u_1^5 dx.$$

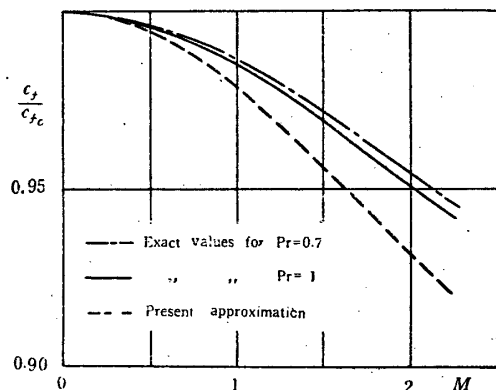
を得る。これによつて壓縮性による剥離促進の程度を簡単に推定することができる。

#### § 4. \$(1-\sigma)^{n-1}=1\$ とおいたことの影響

最後に本文の取扱いで運動方程式の粘性項にある \$(1-\sigma)^{n-1}\$ を 1 とおいたことの影響について一言する。

一般的にこの影響を論ずることは困難であるから、平板 (\$u\_1=\text{const.}\$) の場合についての考察から、一般の場合を推すことにする。§1 の考察から、方程式 (12) の解から求められる平板の摩擦抵抗係数 \$c\_f = \tau\_0 / \frac{1}{2} \rho\_1 u\_1^2\$ と、同じ層外状態に對する縮まない流體の場合の抵抗係数 \$c\_{f0}\$ との比は \$(1-\sigma\_1)^{\frac{1-n}{2}}\$ に等しいことが容易に結論される。第 10 圖にこの関係 (\$n=0.76\$ とする。) を Mach 數に對して描いたものを示す。同じ圖に Prandtl 數

Pr が 1 および 0.7 で表面熱傳達の無い場合に筆者が數値解法によつて求めた嚴密な値 (50 頁脚法の論文) を示してある。(Pr=1 の場合については既に Kármán と Tsien<sup>(12)</sup> が同様な計算を行つてゐる。) これから、本文の近似は壓縮性の影響をいくらか過大に評價していることが分る。恐らく一般に壓力勾配のある場合にもこのことが言えるであろう。然しながらこの圖からも分るように元來境界層に及ぼす壓縮性の影響は大きなものではない(圖の縦軸のスケールは非常に擴大してある)



第10圖 熱傳達の無い平板の摩擦抵抗係數の Mach 數による變化

ことから、本文の近似で實用上充分である。

§2. および §3 では §1 において導き出した方程式を直接解かないで運動量積分の利用によつて剥離に及ぼす壓縮性の影響を簡単に求める方法を示した。然し一般に言つて縮まない流體の場合でもこの種の計算の精度についてはかなりの疑問があるようである。この點から言えば、むしろ方程式 (12) を第 1 章と同じ方法で解く方が無難である。第 1 章の方法ではある點の境界層の速度分布形がその點における \$\theta^2/\nu \cdot du\_1/dx\$ なるパラメーターで一義的に定まるといふような假定を用いないので、いわゆる境界層の發達の履歴がほゞ正確に取入れられるからである。

以上第 1 章において縮まない流體に對する境界層方程式を解く新しい方法を示した。實例計算の結果から見てこの方法はかなりよい精度をもつてゐる。

第 2 章では縮む流體の場合への擴張を行つた。また縮む流體と縮まない流體の境界層に關する相似關係を示し、これにもとづいて剥離に及ぼす壓縮性の影響を簡単に求める方法をも示した。

## 文 献

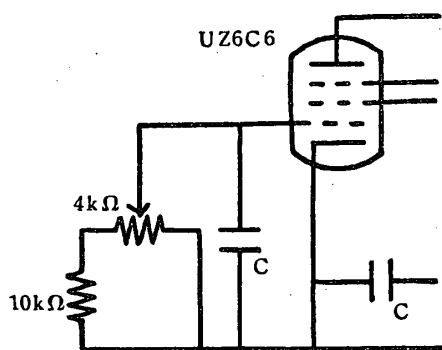
- |  |   |
|--|---|
| (1) Mises : <i>ZAMM</i> , 7 (1927), 425.                   | (7) Green : <i>ARC R&amp;M</i> , No. 1313 (1930)                          |
| (2) Kármán-Millikan : <i>NACA T. R.</i> No. 504 (1934).    | (8) Falkner-Skan : <i>ARC R&amp;M</i> , No. 1314 (1930).                  |
| (3) Huber : <i>ZAMM</i> , 7 (1927), 469.                   | (9) Fage-Falkner : <i>ARC R&amp;M</i> , No. 1369 (1931).                  |
| (4) Howarth : <i>Proc. Roy. Soc., A</i> , 164 (1938), 547. | (10) Dorodnizin : <i>Appl. Math. &amp; Mech.</i> U.S.S.R., 6 (1942), 450. |
| (5) Schubauer : <i>NACA T. R.</i> No. 527 (1935).          | (11) Tani : <i>J. Phys. Soc. Japan</i> , 4 (1949), 149.                   |
| (6) Millikan : <i>J. Aero. Sci.</i> , 3 (1936), 91.        | (12) Kármán-Tsien : <i>J. Aero. Sci.</i> , 5 (1938), 227.                 |

(1951 年 5 月 2 日 受理)

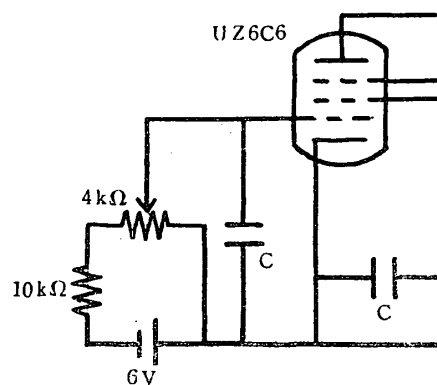
# 正 誤

| 巻 | 號    | 頁   | 左 右 | 行*    | 誤   | 正   |
|---|------|-----|-----|-------|---|---|
| 4 | 9~10 | 243 | ○   | 12    | (本表 a 圖)<br>第 1 圖左下部  | 本表 b 圖  |
| 4 | 9~10 | 243 | ○   | 7'    | (1) 式右邊第 2 項<br>$\frac{\varepsilon_0+1}{\varepsilon_0+2} \cdot (v+\beta)$ | $\frac{\varepsilon_0-1}{\varepsilon_0+2} \cdot (v_0+\beta)$ |
| 5 | 1~2  | 58  | ○   | 12    | 緒む  | 縮む  |
| 5 | 5    | 175 | ○   | 第 9 圖 | 0005 Mg   | 0.05 Mg   |
| 5 | 5    | 175 | ○   | 第 9 圖 | 10 Mg   | 1.0 Mg  |
| 5 | 5    | 177 | ○   | 28    | 効果  | 効果  |
| 5 | 5    | 185 | ○   | 5'    | $\cos \mu y$  | $\cos 2\mu y$   |
| 5 | 5    | 187 | ○   | 7     | Q   | Q'  |
| 5 | 6    | 218 | ○   | 31    | 分解液   | 分解  |
| 5 | 6    | 230 | ○   | 第 1 表 | Gu 20, 22   | Cu 20, 22   |

\* 行數に ' を附したものは下より数えたもの。



誤  
(a 圖)



正  
(b 圖)